

ねえ
おじいさん

目次

老いる 5

ねえ おじいさん 9

老朽化 15

素敵な異次元 23

地獄 30

老人宿 39

詩を書くこと 61

老いる

なんとなくものたりなく

なんとなく時が過ぎ

自己と外界に

透明の幕が下り

それが次第に

厚くなる

すべてのものが呆然と

すべてのものがカスミ

自己が社会から

自己が地上から

自己が宇宙から

消えていく

私は
懸命に 生きたが
その証は
杳として しれず
ただ 混沌の中に
私の意識は混濁し
ああ
閉じ込められた
陋屋の
澱んだ
空気の中に
漂う
せめて明るい
爽やかな
陽光と大気の中に

拡散し
天空の中に
溶け込み
嫺やかな
時空の
一部とならんことを
なんとなく
思いつつ
思いは
感じつつ
刻の中に
溶け込んで行く
私の
生き様
私の

人生の文字
私のいのち
私の
老いの残り火
なんとなく
ただ
なんとなく



ねえ おじいさん

あなたが

わたしのことを

おじいさんと呼んだのは

まごが

二歳の時だ

私は

亥一郎さん

で はじまって

外向きには

主人になり

子どもが

声を出し始めた頃

時折

お父さんになり
いつのまにか
まったく
お父さん になつた

現代の
お父さんの
てて座は
どこか
空いている席で
子どもの声が
瘖高い騒がしさから
低い太さになり
少なくなり
消えていくと
てて座の位置に

亥一郎さんが復活した

つかの間

お父さんと亥一郎さんが同居し

やがて

亥一郎さんの姿が薄くなり

お父さんもゆらゆらと

影が薄くなる

或る日

おじいさんが

姿を現した

ジイジのほずが

保育園

が

おじいさんに

変えて

ジイジは
おじいさんになった
家では
おじいさんの
じい座は
はじめからなくて
テレビという
現代いろりの回りは
総てまご座になり
おじいさんは
姿を消して
おばあさんの
ような
おじいさんの
時代になった

ねえ
おじいさん
あなたが
そう呼んだときから
私は
亥一郎ではなくて
おじいさんになった
でも
考えてみると
私は
あなたを
お母さんでもなく
おばあさんとも
呼ばず
「おい」

となんて
恐ろしくて言えず
かろうじて
敏江 と
結ばれた時から
呼んできた
ねえ
おばあさん



老朽化

歩行者信号の

瞬きは

めまぐるしく

早くなり

太陽は慌てて

昇り

足速く

姿を消し

垂れ込める

夜の闇も

また

急いで

明るさを取り戻す

秒針は

性急に
時を打ち
時計の針は
ぐるぐる回り
デジタルさえも
明滅を
速くする
丁度
瀑布に近づく
流れのように
刻は
私の回りに
凝縮し
疾風となつて
過ぎて行く

駅までの道も
マーケットの店先も
遙かにかすむようになり
まるで
万里の彼方の
陽炎かげろうになる
辿り着いた
駅の階段は
高くなり
巨人の
お城のように
私を拒む
髪がうすく
細くなり
顔の

彫りは深く
ほうれい線は
その名の通り
豊かになる
皮膚は弛^{たる}み
まだらに
スチールグレイに
変色し
血管は
表に
出ようとものがき
内臓の
膨らみも
鼓動も
小さくなり
か細くなる

背が縮む
目玉が縮む
総ての細胞が
微少になり
そして
疎^{すく}んでいく
団塊の
老朽化は
高度成長期の
コンクリート
脆^{もろ}さを秘めたまま
軋^きみ
歪み
崩落し
或る日

突然
終わる
抗う術は
星の数ほど
少しは
補修できた
と 思いたい
できれば
老を
晒すことなく
突然崩壊する
橋のように
生涯が
ストンと
断ち切られることを

儂い望みを
暗黒物質のように
充滿させて
心とともに
萎しほんでいく
それは決して
小さくはならない
幼児にも
赤子にも戻らない
ただ大きいまま
萎しほむのだ
無惨な
ことを
自らの手で断ち切る
権利を
誰も恐れて与えはしない

何を恐れて与えはしない
できれば
みんなに挨拶回りをして
幸せだったよと
ベターハーフに挨拶して
自らの意志で
宇宙の中に溶け込みたい
老朽化した
橋を
ビルを
一息に爆破するように
虚空の中に
散っていききたい



素敵な異次元

高年手帳をいただいた

大学の通信教育は

4 回生になった

しかし学生証を

使ったことがない

借りている畑

夏野菜の水

週2コマ

女子大での講義

同人誌は

19号の発刊準備

バタバタと

ドタバタと

時が過ぎる

マンションの
息子が巣立った後の
8畳部屋へ
リビングの隅の
「てて親コーナー」から
引越した
私の書斎
机と
本と
本と
パソコンと
プリンタと
プリンター
ドットから
インクジェットに進化した

プリンター

起床

ストレッチ

排便 洗顔 着替えに食事

四誓偈と般若心経

書齋

ウィンドウズに

マイナーなワープロ「一太郎」

青白い画面に 光へ進む

そこは

広大な空間

140億光年の宇宙も

クオークもレプトンも

包摂し

神や仏が微笑み
空間と時間が交錯する
電脳の世界
私は
詩をよみ
物語を紡ぎ出す
神の如く 仏の如く 或いは光の戦士の如く
老いた肉体と
老いた精神は
永遠の未来に立ち戻り
いつのまにか
私は青年の心と
自由な肉体をもつて
叫んでいる
私の仕事場
広大な時空

知識が空間に刻まれ
感情が
波動となつて
ブラックホールを超える
なにもものにも
閉ざされることのない
精神の空間
手にする武器は
日本生まれのワードプロセッサ
一所
懸命に
戦い続ける
しかし
永遠という
瞬間の刻は
脆く

儂く
過ぎゆく
夢のしずくは
飛び散り
拡散し
そして
静かに
収斂し
私の心に立ち戻る

現実の中に
立ち上がり
リビングに向かう
「昼ご飯！」
粗大ゴミ
濡れ落ち葉

ワシも族が
現れて
傲慢で卑屈な顔をする

かくしてジタバタと月日は流れる
たぶん
私が異人となって
旅立つまで
私の仕事場へ
素敵な異次元へ



地獄

明石六時五十三分発

新快速は

知り合い同士で

乗り込む

文字通り

尻合

一駅前に

満員で

誰も

詰めてはくれない

だから

この人の壁に

割り込むには

オシリから

それで
朝の新快速は
オシリアイになる

突き進み

奥へ進み

座席の前に立つ

剛の者

微かな

望みに

震え立つ

だが

三ノ宮でも

芦屋でも

降りる者は

珍しい

この電車
大阪までの
沈黙列車
朝の八時の始業に
間に合うための
直通電車
座席は
頭を垂れた
眠人
通路は
虚人
顔の前の
僅かな空間で
スマホと
文庫が
交錯し

四十分間の
苦行は
スマホと文庫の
異次元
半眼座禅に
なつて
虚ろな瞳を
遊ばせる
七時三十三分到着までの
虚数の時間
私は
平然としつつ
さほど
こたえはしない
と自分にいう

でも
緑りよくじゆ 寿には

無理と見えて

半眼座禅が

全眼仁王になつて

駅に着く度

全身がこれ耳となり

眼となつて

空席を漁る

儂い望みは

その度に脆くも崩れ

ささくれだつた心が

真つ赤に充血する

「老人に席を譲らぬか」

と

勝手年寄りが

額に皺を寄せて立っている
哀れな自分に
ふと気がついて
あわてて
南無釈迦牟尼仏
と言った途端に
目の前の席が空く
「は、はやく座らねば」
あせりは
たちまち地獄の
餓鬼の如くになり
その波動は
四方に伝わり
蜘蛛の糸は
ぷつんと切れる
影のように

風のように
横手から
誰かが
輝く空間に
腰を降ろす
瞬間
欲望は落胆にかわる
ランプブラックの
欲望は
カーマイン色の
怒にと
変化し
私は慌てて
吐息をもらす
南無釈迦牟尼仏
いかん

い かん
い かん
た か が
た か が
座 席 だ
哀 れ な 小 心 に
言 っ て 聞 か せ る
こ だ わ る ま い
こ だ わ る ま い
南 無 釈 迦 牟 尼 仏
途 端 に
席 が 空 い て
私 は
歡 喜 の 腰 を
降 ろ ・ ・ ・
あ れ ま あ は て さ て

大阪に着いていた



老人宿

光と

時間と

貪瞋痴が

染みこんだ

顔が

F氏に集まった

彼は

六十八歳

六十歳で

高校の校長を

退職後

県の機関で

館長を三年して

終わりにかと思つたら
別の機関で主任相談員を
二年した
それで
終わりにかと思つたら
本庁で
子育て統括アドバイザー
六十八歳になつたので
ついに
と思つたら
今度は
高校の連合体で
主幹教育指導員を
三年するのだそうだ
どれもこれも
フルタイムと言えば

聞こえが厳しいが
実際は名誉職で
ぶらぶらしていて
月収が
大学初任給の
倍はある
世渡りの上手い方で
小学校教員から
県の指導主事試験
パスしたら
あつ
ああつ
という間に
県の教育次長
定年三年前に
旧制からの伝統を持つ

県一等の
高校の校長
あつ
ああつ
という間に
文科省の
全国研究を引き受け
県の高等学校校長会
会長
これで
七十歳になると
褒章は
間違いない
凄い人だ
ウウツ

喜ばしいことだ

私は

ひっくり返って

指を咥えているだけだ

ご同慶の至り

○氏は

六十歳で中学校長を

退職して

自治会館の館長を

五年して

古い住処を

延べ坪が

六十もある

立派な

プレハブ住宅に
建て替えた
トイレも浴室も二つあり
暖房便座に
ミストサウナ
坪庭のある 十二畳の和室には
河原進の
扇面吉祥図 が鎮座し
住宅以外に
二棟の
賃貸マンションも持ち
今は
地域の保護司会長で
老人会長でもある
やっぱり
七十八歳くらいで

褒章されるだろう

私は

引きつった

皮膚の顔に

引きつった

笑みを浮かべて

「すごいですねえ」と

心に指を啜えている

でも

はあ・・・

凄いなあ

ご同慶の至り

S氏は

大学で
教えている
中学教員から
県の指導主事に出て
そのまま
定年を迎えるか
と
思ったら
なんと
なんと
有名大学の教授だ
「週にハコマだ」
と渋い顔だが
みんな
にこにこして
聞いている

中学の授業なら
週に十六時間で
ゆとり有る部類だ
「雑務が多くてな
と
笑いながら言う
と
みんな
にこにこして
聞いている
教授会に
研究費の明細作り
論文審査に
市の教育改革委員
これまた
いざれ褒章と
なるだろう

私は
あんなことくらいと
思いながら
滔滔と
妬ましさを
テレビに夢中の妻に
ぶつける
指を啜えて
ええなあ
ええなあ
ええなあ
うん

ご同慶の至り

K嬢は
大柄だ
小学教員から
勇気を出して
日教組が反対していた
教員養成大学の
大学院に入った
凄いことだ
偉いことである
みんな
この場合
たぶん みんなは みんな
その みんなは
内心では
大学院に
行きたかった

なにせ
二年間
現場を離れて
給料を貰いながら
出張手当も付いて
学生 出来るのだ
しかも
しかも
修士号がとれる
修士じゃないぞ
修士だぞ
でも
あの大学は
「管理強化」
「教育偏向」
「現場を捨てるのか」

ということ
ほんの
少しは
行ってみたいと
思わぬでもなかったが
まあ
そういうことで
強い組合
に遠慮して
できなかった
K嬢は見事
K嬢の勇氣
そして
K嬢は
修士を取った

だが
なんと
なんと
組合の反対で
学校には戻れず
長い期間を
指導主事という名前で
研究所の
雑務係となった
組合の組織率が
100%
から
から
から
とうとう
25%に落ちて

ようやく

小学校の校長に戻ったが

やはり居心地が悪く

上司のツテで

大学の教授になつた

いきいきと

生徒指導の

講義を

されている

行政では

上に逆らつたり

ルールから外れたり

強い団体から睨まれると

名誉勲章の推薦はしない

だから

褒章は
少し
無理かも
知れない

しかし
こんな生き方も
私は出来ない
指を啜えて
感服している
ため息つきつつ
敬服している

ご同慶の至り

T氏は

中学校の教員を
定年まで勤め上げて
六十歳から
時間講師になつた
フルタイムもあるが
身体もしんどいし
給料が減つて
同じ仕事は辛い
三年続けたが
あと二年を残して
講師は辞めた
今は
三反の
実家の畑仕事
詩吟の会
山歩き

でも

時間が余りすぎて

また

時間講師をしたいと思っている

でも

お声はかからない

二年前に

勝手に講師を辞めたからだ

上の覚えがめでたくないからだ

T氏は

思っている

本を読むことが多い

現役時代は

ゴルフも

麻雀もしていた

飲み会も

でも

今は

時間の海に

ぷかりぷかり

浮いている

何もすることがない

それは

つらい

居酒屋という

老人宿で

退職職員会や

吉田中会や

52年会や

藤田会が

開かれる

度に

出世話や

大学の先生や

民生委員や

保護司や

退職校長会長や

老人会長の

話も聞くが

そこまで頑張れなかった

知人達の

羨望と

理解顔の羨望と

嫉妬と

称賛語の嫉妬と

幸運

と言う単語だけの

顔が

現れるのを

見て

それもまた

生き方だと

思っている

褒章はまず無理だ

私はそれをご立派と

本当に少しはそう思いつつ

いやいや

私の方が少しはましだワイと

「慢」の

頭で
指を咥えている

ご同慶の至り

いつも

私は

老人宿で

控えめな顔で

誇らしげな瞳で

控えめな言葉で

控えめな話を

おろか
癡な心で

結局の所

得意げに話している

バカな話だ



詩を書くこと

私の詩を読んで下さった方から、お便りをいただきました。

その中に「詩を書くのは履歴書を書くのではない」というくだりがあります。

その通りで「文学」というものは、自分の考え、思い、感情を語り、表出します。それがないと人の心を動かすという「文学」ではなくなってしまう。従って逆説的に言えば、履歴書でも記録を読んでいたら心に響いたという場合も考えられないことはありません。が牽強付会でしょうね。

次に、何処まで出すかと言うことで

す。田辺聖子か瀬戸内寂聴か忘れませんが「ものを書くことは銀座を裸で歩くようなこと」という例えを出されたのを覚えています。

内容やテーマにもよりますが、自分をきれいに、高潔に、男らしく或いは女らしくみせようとしたら、その小説などは嘘になつてしまいます。

また「人には様々な荷物がある（趣意）」という文面もありました。そのとおり、どのような人間でも大なり小なり、波風、山谷のある人生を送っています。人を傷つけたり傷つけられたりもしているでしょう。

それが文章から読み取れないと、人の心に入る作品にはならないわけです。

読み取っていただくために作品は、
具体的に描写していますから「文章に
表すことが辛いと思われたことがあり
ますか？」と書かれていました。

私の第一詩集『ねえ おしゃかさま』
の中の64ページの詩「しんだ か・
・」を例に取ります。その最後の所、
73ページの前半は、それまで書いて
きた具体的な父親の一個の人間として
の惨さ、辛さが、総て凝縮し、私の中
に落ち込んで昇華されたところです。
最後の部分は次のようなものです。

※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※

親父の顔を見ていたら

不意に臉が熱くなり

目の玉ふくれて

爆発し

おいおいと

とめてもとめても

おいおいと

還暦男が泣き出した

悲しかったのではないのです

寂しかったのでもないのです

終わった安堵感でもありません

でも遠慮なく、大の男が

充分喚いて泣きました

それで

しんだ か と 思ったのです

うのが仏教の教えです。それを「無我」といいます。

しかし物事が「縁起」であるならば、縁によってのみ生じる「縁我」というものも存在すると私は信じているのです。それは縁という関係性の中で、変化しつつ存在する個人の本质です。

そしてその私があるのは両親や兄弟、妻や子どもたちの、そして、三世の人生の中における様々な人たちとの「縁」によるのだと思います。

それは、人との縁だけではないかも知れません。存在するもの総てだと考えています。そういう立場から、私は「詩」を書いていきます。

この第二詩集は、表紙に「詩小説」と入れました。

最初の「老いる」などは、いわゆる詩の形式です。しかし、後の多くは、半分従来の形式でありつつ、また完全に従来の形式から逸脱して書いています。

叙事詩と言うほど、或いは叙景詩というものでもなく、私は小説を詩で書いているのです。他人とかわる場合の内容は、事実と作り事を混ぜた虚構です。事実そのものを書くのは、これはいけません。創作は想像行為であつて、フィクションなのです。で、「これはあの人だろうか・・・」と考えられなくてもよく分からないというぎりぎりの

線で書きました。私の中に私自身が反映した人物や事柄なのです。他人やその出来事を描きながら、やはり自分を問うているのです。自分を描いているのです。総ての人生を肯定しつつ、やはり自分は可愛いのです。そう思う自分を見据えているつもりです。

その私が現在の年齢に辿り着いて、生き様の指針にしているのは、なにごとにも「逃げないで向き合うが、それに拘泥し続けない」ということです。簡単に言うところ「こだわって」「こだわらず」で過ごしたいと思えます。実は書きながら、「まだまだ出来ていないなあ」と冷や汗を拭っています。



大西亥一郎（おおにし・いichiro）
神戸市生まれ、神戸育ち。
中学教員・県教委主任指導主事・市教委課長
・中学校長・短大准教授を経て現在：梅花女子大学非常勤講師
1981・1982年 小学館「わが子に贈る創作童話」優秀賞受賞
1984年 日本童話会新人奨励賞受賞
1999年 半どん文化賞（及川記念賞）受賞
・ポプラ社「心があったかくなる話 4年生」
・リブリオ出版「兵庫の童話」
・神戸新聞出版センター「海とめんどりとがいこつめがね」
・偕成社「学級ノートのミステリー」
・兵庫県学校厚生会「ひょうごの童話」 他
小説・童話 明石市文芸祭市長賞「氷」「星月夜は車の日」他
随筆・童話 神戸新聞文芸入選「あとのまつり」「記者のたまご」他
2008年～ 「アクトス」代表・編集人。
2010年～ 東はりま文化 子午線編集企画顧問
2011年～ 栴檀編集委員

『総合文藝誌『アクトス』臨時増刊号
第5巻第5号・通巻第21号』

第二詩集

ねえ おじいさん （詩小説）

二〇一三年六月二十一発行

第一版

著者 大西亥一郎

発行者 大西亥一郎

発行所 大和評論社

〒六七三―〇〇三一

兵庫県明石市宮の上一十七六一四

電話〇七八（九二三）四五六二

非売品（頒価八〇〇円）

©2013 Ichiro Onishi